

## 2024年11月17日 降誕前第6主日礼拝メッセージ

「敵を愛せよとの神の言」

牛田匡牧師

聖書 マタイによる福音書 5章 38-48節

「敵を愛しなさい」という言葉を聞いたら、皆さんはどのようにお感じになられるでしょうか。きっと多くの方が、ギョツとされると言うか、「聞き間違いではないか」と耳を疑われるのではないかと思います。ロシアがウクライナに軍事侵攻してから、もう2年半以上が経ちますが、未だに戦闘が続けられています。イスラエル軍によるパレスチナ・ガザ地区への攻撃も、昨年10月に始まり、すでに1年以上が経過しましたが今も尚、爆撃は止まず、犠牲者は既に4万人を超えているとのことです。そのような状況の中で、「敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい」(5:44)などということが、本当に出来るのでしょうか。

アメリカの大統領選挙では、トランプ前大統領が再任することが決まりました。アメリカだけではなく日本でも、また世界中で、格差と分断が拡大し、保守・右翼政党が躍進し、思想的にも対立が深まっています。自分たちの生活が苦しいのは、誰のせいで、何のせいか、ということをつかりやすく明示し、その原因を排除さえすれば、目の前の問題は解決すると思込込まされた人々は、いとも簡単に暴動へと駆け出しかねません。世界のあちこちでそのような対立の火種がくすぶっているようで心配です。そのような状況であるにも拘らず、今回の聖書の言葉のように、「敵を愛しなさい」(44)、「悪人に手向かってはならない」(39)と言われたら、どうでしょうか。「ただひたすら我慢して、泣き寝入りしなさい」ということを、イエス様は語られたのでしょうか。そんなことはないはずで

DV(ドメスティック・バイオレンス)にせよ、パワー・ハラスメントや、セクシャル・ハラスメントにせよ、何かしらの暴力や抑圧を受けている人に対して、もし教会が「ただひたすらに忍耐・我慢して、相手を受け入れなさい。『右の頬を打たれたら左の頬も打たせなさい』(39)、『下着を求められたら、上着をも与えなさい』(40)、手向かわず、従順に相手の言うことを聞きなさい。それが敵を愛すること、相手を大切にすることであり、神様はそんなあなたを喜んで下さる……」などと語っているのだとしたら、それを言われた方は、そう遠くないうちに、殺されてしまうに違いあ

りません。たとえ身体は生きていても、心、魂が破壊されてしまいます。そのようなことは誰にでも想像がた易いことであるはずで、なのに、どうして聖書には、反対のことが書かれているのでしょうか。実際に 2000 年前に、この地上を歩まれたイエス様は、本当にこのようなことを言われたのでしょうか。

「マタイによる福音書」の 5 章から 7 章には「山上の説教」という小見出しが付けられていて、イエス様が集まって来ていた大勢の人々に対して、お話された内容がまとめられています。ですが、そこに集まって来ていた大勢の人々、ここで「あなたがた」と言われている人々とは、どのような人々だったのでしょうか。そのことは 5 章の直前、4 章の最後、24 節以降に書いてあります。即ち、そこに集って来ていたのは、「いろいろな病気や痛みを苦しむ者、悪霊に取りつかれた者、発作に悩む者、体の麻痺した者など、あらゆる病人たち」であり、いわゆる富と権力を持たない、差別され、搾取されている側の人たちでした。そのような人々に対して、イエス様は「悪人に手向かってはならない」(39)、「敵を愛しなさい」(44)とされました。何故でしょうか。

まず冒頭の 38 節にある「目には目を、歯には歯を」というのは、古代から有名な「報復」「仕返し」のルールです。ヘブライ語聖書の中にも、いくつも出て来ます(出 21:23-25、レビ 24:20、申命記 19:21)が、歴史的には更に古いバビロンの「ハムラビ法典」にも記されている法律で、古代オリエント社会で共有されていた「同害同復法」でした。現代の私たちの感覚からすると、「目には目を、歯には歯を」というのは、残酷なようにも感じるかもしれませんが、元々は「目をつぶされたから、殺してやる」というように、報復、復讐行為がエスカレートしないように定められた相手との対等性を保つための法律であり、なおかつ「自分がされないために、相手にもしない」という抑止効果のための法律だったようです。

しかし、イエス様は『右の頬を打つ者には、左の頬をも向けなさい』(39)、『下着を取ろうとする者には、上着をも与えなさい』(40)とされました。そもそも右の頬を打たれる時とは、どのような状況でしょうか。こちらが右の頬を打たれるわけですから、向かい合っている相手は左手で打っていることになります。しか

し、実際には右利きの人の方が多ことを考えると、右手の掌ではなく、手の甲で打っていることとなります。これは相手を穢れた存在と見なして、掌ではなく手の甲で払うということですから、より一層相手のことを侮辱した行為だったと考えられます。そのようにして自分を侮辱してくる相手に対して、こちらから更にもう一方の頬を向けるというのは、通常では考えつかない、突拍子もない反応でした。

また下着と上着というのは、所謂室内で着ている「普段着」と、外出する時に上に羽織る「外套(コート)」のことでした。庶民はいわゆるお布団を持っておらず、夜、寝る時には、その上着、コートをかけて寝ていたようです。ですから、ヘブライ語聖書の律法には、「人の上着を取ってはならない。借金のかたとして取っても、日没までには返さなければならない。そうすれば彼はその上着にくるまって寝ることが出来る」とも記されていました(出 22:25-26、申 24:12-13)。布製品は当時、とても高価なものでしたから、庶民は上着は一つ。普段着も数枚しか持っていませんでした。そして、実際には律法を無視した、借金の取り立ても多く行われていたでしょうし、このような言葉に、人々は実体験を重ねて聞いていたのだと思います。そのような人々に、イエス様が言われた「借金のかたとして普段着を取ろうとするものには、上着も与えなさい」というのも、「左の頬をも向けなさい」と同じく、相手に対して通常では考えつかない、突拍子もない反応に他なりませんでした。

それらが言っていることは、決して「黙って、従順に、されるがままにしておきない」という「無抵抗」のことではなく、また武器を手に取り、暴力で対抗することでもなく、むしろ「非暴力で不服従を徹底する」ということなのではないかと思います。暴力に暴力で対抗するのは、「目には目を、歯には歯を」の考え方ですが、その行く先は滅びでしかありません。かと言って「非暴力無抵抗」でも、自分の心身が破壊され、殺されていくだけです。生き残る道は、ただ「非暴力不服従」のみです。39 節の「悪人に手向かってはならない」は、正しく訳すと「悪人(=威圧者)のように対峙するな」(本田哲郎訳)です。相手と同じ暴力でやり返すのでもなく、黙ってやられているのでもなく、第三の手段として、尊厳を持って不服従すること、その先にこそ、活路があるということなのではないでしょうか。

「敵を愛せよ」という神の言に従って、「敵を愛する」、自分たちを傷つけて来る相手をも大切にすることとは、とても出来そうにない、難しいことです。ですが、「(天の)父は、悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださる」(45)とされている通り、そのような全ての命を愛おしみ、大切にされている神様によって生かされている私たちだからこそ、たとえ敵対する相手であっても、大切にすることが出来る道があるはず。「非暴力不服従」という第三の道で、搾取と暴力、対立と破壊とは異なる、新しい道へと共に活路を見出して行くことが出来るはず。イエス様はそのことを告げておられるのではないかと思います。

最後の48節で言われている「あなたがたは、天の父が完全であられるように、完全な者となりなさい」という言葉ですが、この言葉を聞くと、「完全な者」なんて、それこそとても無理、と言いたくなります。ですが、この「完全」という言葉は、「成熟した」「十分に成長した」「大人な」という意味の言葉です。それこそ、子どもの頃には、「18歳になったら」や「20歳になったら」、もしくは「社会人になったら」自然と「一人前の大人になる」。ある日を境に「大人」というものに変身するのかと思っていたのが、実際にその年齢、時期になってみると、まだまだ思い描いていたような「大人」には、全然慣れていない自分の姿に気付きます。「大人になる」というのは、果物が徐々に成熟していくように、長い時間をかけて少しずつ変化していく、一進一退、紆余曲折を繰り返しながらゆっくりと成熟していく……、そのようなものなのではないでしょうか。

世界中のあちこちで、また社会のあらゆる所に、対立や敵対、抑圧や暴力が存在しています。ですが、その中であっても、社会の片隅からでも、私たちは小さな平和を造り上げていくために、十字架での死に至るまでに、自分に敵対する者たちをも大切にされたイエス様のように、私たちが敵対する人たちをも大切にすることが出来るように、大人を目指して少しずつ成熟させられ、変えられていきます。